

自閉スペクトラム症の中学生における T A T の特徴

関山 徹*

(2019年10月21日 受理)

Features of Thematic Apperception Test in Junior High School Students with Autism Spectrum Disorder

SEKIYAMA Toru

要約

自閉性スペクトラム症の中学生における人間表象の様相を多面的に把握するために、Thematic Apperception Test (TAT) を使用して分析を行った。少数事例を用いた試みであったが、自閉性スペクトラム症の中学生群 (N=4) は定型発達 of 中学生群 (N=4) と比較して、「登場人物間の関係性」および「登場人物間の関与」、「因果関係」において言及が少なく、「登場人物数」においては顕著な差は認められなかった。自閉性スペクトラム症の中学生は、人間像を表象する機能は保持している一方で、社会的刺激に対する指向性が低いことが明らかになり、その背景には「直観的心理化」(別府, 2012) や「マクロ的・抽象的な情報処理」(小嶋, 2019) を苦手とする傾向があることが考察された。また、TAT 人間表象スケール (暫定版) の呈示をした。

キーワード：発達障害、対象関係、人間知覚、物語化、投映法

I. 問題と目的

DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013) によれば自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) の中核症状 (基準 A) は、持続する相互的な社会的コミュニケーションや対人的相互作用の障害とされている。そして、公立小中学校の通常学級に在籍する児童生徒の 6.5% が発達障害である可能性が高いと文部科学省 (2012) が報告しているように、ASD 者をはじめとする発達障害の人々は特別に珍しい存在ではなく、実際には定型発達者と関わり合いながら日常生活を共に過ごしている。つまり、ASD 者の困難はコミュニケーションや対人交流がまったくできないことでは

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

なく、あくまでも定型発達者との相対的な比較による不得意さなのだと言える。また、ASD 者がその特性によってどのように日常世界を体験しているかを理解することは、よりよい支援や共生のための端緒となるだろう。そのように考えると、投映法は被検査者の世界を迫体験しやすい手法であるため、知能検査では得られない ASD 者の内的体験の様子を具体的に知ることができる可能性が高い。とりわけ Thematic Apperception Test (TAT) は、ロールシャッハ法のようにインクのしみが何に見えたかを答えるのではなく人物像が描かれた絵刺激の物語化を求める課題であるため、被検査者の対人的関心や社会的認知の様相を把握することにより適している。たとえば、関山 (2015) は TAT を用いて高校生以上の青年期広汎性発達障害者における人間表象の特徴を、5つの観点から明らかにしている。しかしながら、TAT による ASD の研究は少なく、特に中学生以下を対象にしたものは国内においてほとんど見当たらない。

そこで本研究では、ASD の中学生における人間表象の特徴を多面的にとらえるため、試みに少数事例を用いて検討することにした。

II. 方法

1. 被検査者

ASD 群は、自閉スペクトラム症と診断された中学生 4 名 (通常学級ないしは特別支援学級に在籍) から構成され、知的障害を伴っていない。放課後等デイサービス事業所 (静岡県内および大阪府内) の協力のもと、被検査者本人および保護者の同意を得て、2016 年から 2017 年までの間に当該の事業所内で検査を行った。また、自閉スペクトラム症に関連する症状の多寡を確認するため、保護者に Social Communication Questionnaire (SCQ; Rutter, et al., 2003) の「誕生から今まで」を回答してもらった。なお、SCQ のカットオフ値は 15 点である。他方、対照群として設けた NonASD 群は中部地方に居住する定型発達の中学生 4 名から構成され、1993 年から 2001 年の間に検査を行った。両群の詳細は Table 1 に示した。

Table 1 被検査者の属性

群	被検査者	性別	年齢	SCQ得点
ASD群	A	男性	15	21
	B	男性	14	20
	C	女性	13	19
	D	女性	14	17
NonASD群	E	女性	14	-
	F	女性	13	-
	G	男性	14	-
	H	男性	13	-

2. 手続き

TAT（ハーバード版）の実施は被検査者ごとに個別に行い、その方法は鈴木（1997）に準拠した。但し、分析に使用する図版は、カード1・2・3BM・4の4枚のみとした。そして、得られた反応から逐語録を作成し、各反応の自発反応部分を分析対象とした。

TAT 反応の分析は、人間表象の共時的側面と通時的側面から行った。共時的側面からの分析（関山, 2015 ; Table 2 に示した）とは、被検査者が産出した物語について、①「登場人物数」、②「登場人物間の関係性（以下、関係性とする）」、「③登場人物間の愛着関係（以下、愛着関係とする）」、「④登場人物間の関与（以下、関与とする）」、「⑤登場人物の内部状態（以下、内部状態とする）」の5観点から評定する方法である。また、登場人物の内部状態に関する補足的な分析として、物語のなかで言及された登場人物の内部状態について抽出（要約）し、当該のカードで一般的に出現しやすい内容と比較照合した。なお、その際の一般性の基準として、関山（2019）がカードごとに設定した「基本反応」に含まれる意思・感情等を用いることにした。

Table 2 人間表象の各側面の評定基準

	①登場人物数	②関係性	③愛着関係	④関与	⑤内部状態
レベル1	物語内における登場人物の数が、カードに描かれている人物像の数よりも少ない（登場人物の数が不明なものも含む）。	登場人物間の関係性について説明されていないか説明が混乱している（登場人物が1人以下の場合も含む）。	登場人物間に愛着を伴った関係が全く述べられていない（登場人物が1人以下の場合も含む）。	登場人物間に何ら関与がない（登場人物が1人以下の場合も含む）。	登場人物の内部状態について何ら述べられていない。
レベル2	物語内で述べられた登場人物の数が、カードに描かれた人物像の数と等しい。[例：カード1：1人、カード2：3人、カード3 BM：1人、カード4：2人]	登場人物間の関係性が、一時的ないしは集合的なものとして説明されている。	登場人物間に愛着を伴った関係（親子や恋人等）が述べられている	登場人物間に弱い関与（特定の他者を志向しているが顕在的でない行為；待つや探す等）が述べられている。	登場人物の内部状態について身体的基盤から述べられている（疲労・酩酊状態等や、表情を直接的に説明したもの）。
レベル3	物語内で述べられた登場人物の数が、カードに描かれた人物像の数よりも多い。	登場人物間の関係のうち少なくとも1対は明確且つ継続的なものとして述べられているものの、残りの他の対ではレベル2相当の説明がなされている。	登場人物間に、愛着対象の喪失（予感も含む）や獲得について述べた関係がある。	登場人物間に強い関与（明示的な対人的行為；話し掛けるや引き留める等）が述べられている。	登場人物の内部状態が心理的観点から述べられている（感情や思考、性格描写等）。
レベル4	—	登場人物間の全ての関係の対が、明確且つ継続的なものとして説明されている。	—	登場人物間に相互作用を伴った関与（具体的で双方向の強い関与）が述べられている。[註]	—

[註] 但し、「結婚する」や「喧嘩する」等のように一言で表現されているだけのものは、具体的なやりとりで欠けるのでレベル3に留める。

通時的側面からの分析とは、登場人物の心理や言動がどのような因果関係によって生じたかについてのものである。具体的には、原因帰属の先を、「①登場人物自身の意思・感情とするもの」、「②〈当該の登場人物の意思・感情〉以外とするもの」、「③絵刺激の特徴とするもの」、「④並列して述べてどちらとも特定しないもの」、「⑤言及しないもの」の5つに分類することにした。また、②については、「A) 他の登場人物の言動・事情」と「B) 〈他の登場人物の言動・事情〉以外」(すなわち非人間関係的な原因)とに区別した。さらに、補足的な分析として、物語のなかで言及された時間経過の有無について確認した。

III. 結果と考察

共時的側面からの5観点による分析結果の詳細を Table 3 に示した。すべての観点において、ASD 群の平均値は NonASD 群に比して低かった。特に「②関係性」や「④関与」においては差が目立ち、ASD 群は絵刺激に明示されていない内容について能動的に意味づけることを苦手とする傾向があると考えられる。その一方で、「①登場人物数」と「⑤内部状態」においてはその差は顕著なものではなく、ASD 群は NonASD 群にそれほど劣らない水準の人物像認知の力や基本的な対人的関心を保っていると言えよう。千住(2018)は、「ASD における社会性の非定型発達は、社会的な情報処理を行う能力そのものの障害よりも、社会的な刺激に自発的に注意を向け、自発的に処理を行う傾向の弱さに起因している可能性を示唆している」と指摘しており、本研究の結果によく合致すると思われる。すなわち、ASD の中学生は、人間像を表象する機能は保持している一方で、社会的刺激に対する指向性が弱いと推察される。

また、「⑤内部状態」の補足的な分析においては、各カードにおける一般的な意思・感情等を含んだ反応が ASD 群では 42% (12 個の反応において 5 個) であったのに対して、NonASD 群では 67% (12 個の反応において 8 個) も出現していた。その詳細を Table 4 に示した。先述のとおり ASD 群の対人的関心は乏しくはないものの、その関心のありようを吟味してみると、ASD 群の登場人物の表情

Table 3 カード1枚あたりの評定値の平均

群	被検査者	人間表象の各側面におけるレベル平均				
		①登場人物数	②関係性	③愛着	④関与	⑤内部状態
ASD群	A	2.25	1.50	1.25	1.25	2.50
	B	2.00	1.00	1.00	1.25	2.50
	C	1.75	1.75	1.25	1.50	2.25
	D	2.50	2.25	1.75	2.00	2.75
	平均値	2.13	1.63	1.31	1.50	2.50
NonASD群	E	2.25	3.75	2.25	2.75	3.00
	F	2.50	3.75	2.00	2.75	3.00
	G	2.25	3.00	2.25	1.75	3.00
	H	2.00	2.50	1.75	2.00	3.00
	平均値	2.25	3.25	2.06	2.31	3.00

Table 4 各カードにおける内部状態の内容

群	被検査者	内部状態			
		カード1	カード2	カード3 BM	カード4
ASD群	A	○ 悩む	-	○ 絶望感	愛情 vs. 愛情
	B	有名になりたい	びっくり	(死んだ)	取り憑かれる vs. 心配
	C	欲しい	どこで本を読もう	疲れる	-
	D	○ 深刻になる	うらやましい	○ 悲しい	○ 殴り返そう vs. 引き止める
NonASD群	E	△ 厭々	恋に憧れる	○ ひとりぼっちでポロポロ	○ 不良 vs. 止める
	F	○ 悩み	不安・励む	○ 罪を後悔・寂しい	△ どうするの? vs. 分からない
	G	○ 捨てるに捨てられない	憎らしい	○ 自分も自殺しよう	病気 vs. (薬を買う)
	H	○ 悩み	-	○ 悩んでいる	-
基本反応(関山, 2019)に含まれる内部状態		悩み・悲しみ・不安	(設定なし)	悲嘆・苦悩	二人の間に意思の拮抗

[○ : 該当, △ : やや該当]

や仕草を解釈する仕方は NonASD 群のそれとは異なっている側面が多いように思われる。別府 (2012) が指摘しているように、ASD 者は心の理論を欠いているのではなく、独自の心の理論をもっていると想定したほうがよいかもしれない。

次に、通時的側面からの分析結果の詳細を Table 5 に示した。ASD 群は、因果関係に関する言及が全般的に少ない傾向にあり、とりわけその内容に着目すると、「①登場人物自身の意思・感情とするもの」ないしは「②A) 他の登場人物の言動・事情」を原因とする反応が 31% (16 個の反応において 5 個) であり、NonASD 群の 75% (16 個の反応において 12 個) に比して少なかった。その一方で、「③絵刺激の特徴とするもの」や「④並列して述べてどちらとも特定しないもの」、「⑤言及しないもの」のいずれかに該当する反応が、ASD 群では 63% (16 個の反応において 10 個) あり、NonASD 群の 6% (16 個の反応において 1 個) に比して多かった。この結果をどのように解釈するべきなのだろうか。別府 (2012) は、「他者の心を何となく感じて理解する直観的心理化 (intuitive mentalizing)」と「なぜ他者がそういう心を持つのかという理由づけも可能な命題的心理化 (propositional mentalizing)」という 2 つの心理化 (mentalizing) のレベルを想定している。そして、定型発達は直観的心理化を生後早い時期から形成してその土台の上に命題的心理化を積み上げる一方で、ASD 者は直観的心理化に弱さがあり、その状況のまま言語能力のみに依拠して命題的心理化を獲得するという。本研究で明らかになった ASD の中学生における絵刺激への分析的態度や不決断性という特徴は、別府の指摘する ASD 者の直観的心理化の弱さに由来するものと考えてみたらどうであろうか。

また、時間経過に関する補足的分析においては、ASD 群では言及のない反応が 81% (16 個の反

Table 5 因果関係と時間経過による分類結果

群	被検査者	カード	因果関係 (原因帰属)					時間経過 なし	
			①登場人物自身の意思・感情とするもの	②〈当該の登場人物の意思・感情〉以外とするもの		③絵刺激の特徴とするもの	④並列して述べてどちらとも特定しないもの		⑤言及しないもの
				A) 他の登場人物の言動・事情	B) 〈他の登場人物の言動・事情〉以外				
ASD群	A	1			○	○	◎	◆	
		2						◆	
		3BM				○		◆	
		4				○		◆	
	B	1						◆	
		2			○			◆	
		3BM			○			◆	
		4						◆	
	C	1	○					◆	
		2	○					◆	
		3BM			○			◆	
		4						◆	
D	1	○		◎			◆		
	2			○	○				
	3BM		○			○	◎		
	4		○				◆		
NonASD群	E	1		◎					
		2	○		○				
		3BM		○	○				
		4		◎					
	F	1	○	◎					
		2	○	○	○				
		3BM	○	○					
		4	○	○	○				
	G	1	○		○			◆	
		2	○	○					
		3BM	○	○					
		4			◎				
H	1			○			◆		
	2			○			◆		
	3BM	○					◆		
	4						◆		
分類の例 (カード1)		自分の演奏に納得がいかないので、思い悩む	母親に説得されて、バイオリンを再開した	バイオリンの弦が切れていたのので、弾けなかった	画面の暗い印象から見て、この子は困っている	-	-	-	

[○ ◆ : 該当, ◎ : 1つの反応において複数箇所の該当]

応において13個)あり、NonASD群の31% (16個の反応において5個) に比して多かった。その意味するところは先述の内容と同様であろうが、分析の精度としては、因果関係の観点をを用いたもののほうが優れていると言えよう。ASD群にも「①登場人物自身の意思・感情とするもの」や「②〈当該の登場人物の意思・感情〉以外とするもの」に該当する反応は少ないながらも存在しており、

時間経過の観点だけでは絵刺激の状況を理解しようとする構えがあることを捨象してしまうからである。また、本研究の結果を踏まえて、人間表象の共時的側面と通時的側面に関する評定の観点を整理し直し、TAT 人間表象スケール（暫定版）という名称を付して、Appendix に示した。

以上をまとめると、ASD の中学生は、人間関係や心理過程についてイメージする力は保っているものの、それらについて積極的に注意をむけて処理する傾向が弱いと考えられる。そのために、絵刺激に明示されていない事柄については、物理的な説明や優柔不断な答え方をしてしまうのだろう。このことに関連する知見として、小嶋（2019）は、ASD 者と定型発達者は異なる認知粒度（cognitive granularity）をもつという仮説を提出している。認知粒度とは「行為主体から見た世界を特徴づける〈分解能〉あるいは〈解像度〉のようなもの」であり、ASD 者は認知粒度が細かすぎるためにミクロ的・物理的（局所的・分析的）な情報処理に偏りやすく、マクロ的・抽象的（全体的・統合的）な情報処理を必要とする心理化で困難が生じやすい、という。この考え方を敷衍すると、物語化を求める TAT 課題では、絵刺激からの多様な情報をミクロ的・物理的に処理するだけでなく、認知粒度を粗くする処理も同時に行って、異なる位相間にまたがる情報を統合する必要があると言えるだろう。ASD 者は後者の処理を苦手とするため、特に TAT においては関係性や関与、因果関係の説明不足という特徴を呈しやすいと推察される。

しかしながら、本研究は中学生の少数事例にもとづくものであるため、その般化には問題をはらんでおり、より大きな標本や厳密なデザインを用いたさらなる調査が必要である。また、ASD の中学生への支援方略について検討を行うことができなかつた点も大きな課題として残っている。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013) Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.). Washington, D.C.: APA [高橋三郎・大野裕監訳 (2014) DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院]
- 別府 哲 (2012) コミュニケーション障害としての発達障害. 臨床心理学, 12(5), pp.652-657.
- 小嶋秀樹 (2019) 脳の認知粒度からみえてくる自閉症とコミュニケーション. 野尻英一ら編著, 自閉症学のすすめ, pp.263-282.
- 文部科学省 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm [最終閲覧日 2019 年 10 月 19 日]
- Rutter M., Bailey A., & Lord C. (2003) Social Communication Questionnaire Manual. Los Angeles CA: Western Psychological Services. [黒田美保・稲田尚子・内山登紀夫監訳 (2013) SCQ 日本語版マニュアル, 金子書房]
- 関山 徹 (2015) TAT 人間表象スケール作成の試み (4). 日本ロールシャッハ学会第 19 回大会抄録集, 48.
- 関山 徹 (2019) 鈴木法を基盤とした TAT の分析・解釈. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 18(1), pp.45-50.
- 鈴木睦夫 (1997) TAT の世界. 誠信書房.

附記

- ※ 本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業〔基盤研究 (C), 課題番号 18K03101〕の助成を受けて行われた。
- ※ 本研究は、日本ロールシャッハ学会第 22 回大会 (2018 年 10 月) および第 23 回大会 (2019 年 9 月) において発表した内容を大幅に加筆修正したものである。
- ※ 本調査に協力していただいた被検査者および事業所の皆様に厚く御礼申し上げます。

Appendix TAT人間表象スケール(暫定版)

	①登場人物数	②関係性	③愛着関係	④関与	⑤内部状態	⑥因果関係
レベル1	物語内における登場人物の数が、カードに描かれている人物像の数よりも少ない(登場人物の数が不明なものも含む)。	登場人物間の関係について説明されていないか説明が混乱している(登場人物が1人以下の場合も含む)。	登場人物間に愛着を伴った関係が全く述べられていない(登場人物が1人以下の場合も含む)。	登場人物間に何ら関与がない(登場人物が1人以下の場合も含む)。	登場人物の内部状態について何ら述べられていない。	因果関係に言及していないもの
レベル2	物語内で述べられた登場人物の数が、カードに描かれた人物像の数と等しい。	登場人物間の関係が、一時的ないしは集会的なものとして説明されている。	登場人物間に愛着を伴った関係(親子や恋人等)が述べられている	登場人物間に弱い関与(特定の他者を志向しているが顕在的でない行為; 待つや探す等)が述べられている。	登場人物の内部状態について身体的基盤から述べられている(疲労・酩酊状態等や、表情を直接的に説明したもの)。	因果関係を並列して述べてどちらとも特定しないもの、あるいは、絵刺激の特徴とするもの
レベル3	物語内で述べられた登場人物の数が、カードに描かれた人物像の数よりも多い。	登場人物間の関係のうち少なくとも1対は明確且つ継続的なものとして述べられているものの、残りの他の対ではレベル2相当の説明がなされている。	登場人物間に、愛着対象の喪失(子感も含む)や獲得について述べた関係がある。	登場人物間に強い関与(明示的な対人的行為; 話し掛けるや引き留める等)が述べられている。	登場人物の内部状態が心理的観点から述べられている(感情や思考、性格描写等)。	原因を(当該の登場人物の意思・感情)以外とするもので且つ(他の登場人物の言動・事情)以外である出来事(すなわち非人間関係的な原因のもの)
レベル4	—	登場人物間の全ての関係の対が、明確且つ継続的なものとして説明されている。	—	登場人物間に相互作用を伴った関与(具体的で双方向の強い関与)が述べられている。 [註]	—	原因を登場人物自身の意思・感情とするもの、あるいは(当該の登場人物の意思・感情)以外とするもので且つ他の登場人物の言動・事情によるもの

[註]但し、「結婚する」や「喧嘩する」等のように一言で表現されているだけのものは、具体的なやりとりで欠けるのでレベル3に留める。